

## 自己評価報告書

平成23年5月11日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520282

研究課題名(和文) ヨーロッパにおける〈愛〉の寓意の変容と衰退  
——中世末から近世へ——研究課題名(英文) The Transformation and Decline of the Allegory of 'Love'  
from the 15<sup>th</sup> to the 17<sup>th</sup> Centuries

研究代表者

前野 みち子 (MAENO MICHIKO)

名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授

研究者番号：40157152

研究分野：北ヨーロッパ中・近世文化史

科研費の分科・細目：比較文学

キーワード：〈愛〉の寓意、ルクスリア、奢侈文化、エンブレム、キリスト教モラル

## 1. 研究計画の概要

主として中世末から十七世紀末に至る北ヨーロッパを対象として、〈愛〉の寓意とその表現形式がどのように変容したのかという問題を、その社会背景と絡めて、以下の三段階に分けて考察する。

(1) 中世末の北ヨーロッパ都市文学における〈愛〉の寓意のトポス及びステレオタイプ表現の目録作成、及びそのルーツからの変容過程の分析。

(2) 中世末から十六世紀半ば過ぎまでの都市文学や出版物に登場する〈愛〉の寓意の分析。ルネサンス・人文主義的知識人の哲学的・高踏的・宮廷的〈愛〉の寓意からの影響。十六世紀七十年代以降の〈愛〉をめぐる寓意と、そこに見られるウェヌスからアモルへの主役交代劇が意味するものを分析。

(3) 十七世紀オランダで数多く出版された〈愛〉の寓意図像集の特色とその社会背景の記述。カトリック圏ヨーロッパの寓意図増収との比較・分析。

この三段階的研究の一貫性と求心性を保つために、以下の四つの観点を常に念頭に置いて考察を進める。

① 〈愛〉をめぐる寓意的言説及びイメージの焦点として、ウェヌスとアモル(エロス)のイメージとその変容・変貌に注目する。

② 十七世紀末まで〈愛〉をめぐる寓意的言説の規範であったオウィディウスの原典とその模倣・引用・短編か・改編、そして図像イメージへの転化に注目する。

③ 〈愛〉をめぐる寓意のトポスとステレオタイプの典型といえる身体各部位の独立・断片化・列挙、心と身体分離・乖離、などについてのテキストと図像に注目する。

④ 都市民と宮廷人、都市民と知識人、新教

と旧教、北ヨーロッパと南ヨーロッパの対概念を分析の際の重要な要とする。

## 2. 研究の進捗状況

当初は、計画した三段階の作業のために各約一年を当て、最終年度の23年度に、作業が遅れた部分を補って全体をまとめるつもりでいたが、中世末を出発点とする作業をしばらく進めるなかで、十二世紀あたりから興隆する商業都市の奢侈文化とキリスト教モラルの関係が、〈愛〉の寓意的イメージに大きな影をおとしていること、それがまた、異教神ウェヌスとアモルのイメージの変容と深く関わっていることが次第に明らかになってきた。プルデンティウスの『プシコマキア』

(後400年前後に成立)を受け継いで生まれた中世的擬人化アレゴリーの思考法と〈七つの大罪〉モラルの影響力は優に十七世紀にまで及んでいるが、中世のウェヌスのイメージは、都市的生活の奢侈化にともなって、〈七つの大罪〉の一つ、色欲を戒める〈ルクスリア〉と重合していくことになる。十四世紀頃から商業都市に公然と設置されるようになる公娼館は、奢侈文化の代表的表徴となると共に、娼婦たちは「ウェヌスの娘たち」と呼ばれて、その存在が〈ルクスリア〉的戒めの焦点を形成した。『プシコマキア』の〈ルクスリア〉は無節操や放恣の一要素として確かに色欲を含んでいるが、〈リビドー〉(情欲/性欲を意味し、これ自体が〈七つの大罪〉の一つである)とは異なるものと位置づけられているのに対し、『プシコマキア』に淵源をもつ十二世紀までの〈ルクスリア〉は、教会建築レリーフや写本など多くの図像資料について分析を進めた結果、〈リビドー〉と混同される傾向をすでに見せ始めていること

が分かった。また、同時代のラテン語や俗語のいくつかのテキスト、あるいは13世紀の代表的アレゴリー文学『薔薇物語』後篇にも、ウェヌスと奢侈文化・娼婦文化（〈ルクスリア〉に言及されるわけではない）の関係が高尚な理念を裏切る現実として描きこまれている。さらに、中世末になると、〈ルクスリア〉は遠隔地貿易などによって繁栄した商業都市で、構造化した娼婦文化に対する警鐘として、つまり中世末都市市民に対するウェヌスへの、市民的〈恋愛〉文化への警鐘として、他の大罪にも増してとりわけ重要な意味をもつようになることが跡づけられた。

以上のように、本研究課題の遂行に当たっては、当初の研究実施計画を大幅に変更し、恋愛と贅沢とモラルの三律的關係を時間軸に沿って探ることが最も目的に合う方法と判断して作業を進めている。

### 3. 現在までの達成度

#### ④遅れている。

〔理由〕

本研究の初年度20年度は、19年度までの科研費による研究課題のまとめが眼病とその後の後遺症によって20年度に持ち越されたため、僅かしか進まなかった。また、二年目の21年度には、2. で記述したように研究実施の大きな方向転換を図ったため、最終年度の現時点において、達成度はかなり低い。現在までに、中世のさまざまな図像資料の収集、そこに窺える道徳的寓意像（ルクスリア）とウェヌスの性愛との関係の分析、いくつかのラテン語・俗語テキストの解説はほぼ終えており、近々二本程度の論文にまとめる準備をしている。また、以下に記述する今後の研究についても、資料を半ばまで収集しつつある。

### 4. 今後の研究の推進方策

十六世紀初頭からの〈ルクスリア〉の戒めは、活発なマーケットの商品流通場面を描く十六世紀ネーデルラントの風俗画に寓意的に現れている。当時の北ヨーロッパ最大の商業都市アントウェルペンの風俗画には、豊かな商品流通がもたらす奢侈と性的放縦（色欲）の関係をテーマに据える絵画が数多く制作され、その背後にはしばしば、若い男が居酒屋＝娼館に居る場面、あるいは一文無しになってそこから追い出される場面など、〈放蕩息子〉を暗示する場面が小さく描き込まれた。ドイツの銅版画・木版画でも、酒宴のさ中にある男女を描き、〈放蕩息子〉というタイトルを付すものが制作されている。また、とりわけ宗教改革後の南部ドイツ語圏において、〈放蕩息子〉は広場の祝祭劇でしばしば演じられ、ネーデルラントでは活人画のテーマともなった。つまり、中世以来繰り返し説かれ

た〈ルクスリア〉は、近世のプロテスタンティズムが広まった地域で新約聖書の〈放蕩息子〉のテーマと結びつき、極めて分かりやすい具体性を伴って、奢侈と色欲の本質連関を戒める定型的モラルを形成していったのではないかと思われる。そして、奢侈から儉約・節制へ、色欲（娼婦との愛）から結婚に結びつく愛への転向・転換を徳憑するモラルが、十六・七世紀にいち早く近代的市民社会のベースを形成した地域において、〈愛〉をテーマとする寓意図像集を次々と生み出していく機縁となったのではないか、というのが目下のところ本研究が目ざす最終地点である。

したがって、本研究課題の題目として挙げた〈愛〉の寓意の「衰退」にまでたどり着くことは時間的に困難であるが、当初の実実施計画の変更は資料分析から得られた知見の必然的結果であり、上述のように今後の見取り図もかなりはっきりと描かれているので、今年度末には、本研究の一定の成果を望むことができるのではないかと考えている。

### 5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

前野みち子「ウェヌスとアモルの変容——恋愛と贅沢とモラルをめぐる考察——」『言語文化論集』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）、査読無、第XXXI巻、第2号、2010年、27-46頁。